

# 帝國海軍水雷術史

## 第一編 海軍水雷術沿革概要

### 第一章 水雷ノ濫觴

水雷ノ要素タル火薬ノ本邦ニ渡來セシハ小銃ノ渡來ト同時ニシテ足利氏ノ中葉ニ屬スルガ如シ然レドモ本邦ニ於テ之ヲ製造スルニ至リシハ天文十二年(西暦一二二〇三年) 紀元一五四三年)種子島銃渡來ノ後ニシテ豊臣時代ノ末大阪役頃ヨリ已ニ地雷火ナル一種ノ火器アリシガ如クナルモ之ヲ水中爆發ニ利用セル所謂水雷火ニ至リテハ安政年間薩摩藩ニ於テ傳習始製セルヲ嚆矢トスルモノノ如シ即チ薩藩ニ於ケル水雷火ノ由來等ニ關シ薩藩海軍史ノ記スルトコロヲ摘録セバ左ノ如シ(薩藩海軍史齊彬公言行錄ノ部)

安政二年乙卯ノ秋江戸ニ於テ諸方弘庵、川本幸氏及ビ杉田成郷等ニ翻譯ヲ命ゼラレ器械ハ宇宿彦右衛門、肥後七左衛門等田町邸ニ於テ製造セリ初メハ器械ノ造法ト用法ノ完全ナラザルニ依リ其ノ功ヲ見ルコト能ハズ數十回ノ試験ヲ經テ遂ニ其ノ功ヲ顯ハシタリト而シテ鹿兒島ニ於テ(安政四年ナリ、南國遣事)御本丸御休憩所ヨリ二ノ丸探勝園御茶屋ニ電信機ヲ通緣シ日々試験シ稍熟練致候

(中略)同四年九月礮御邸へ琉球官吏ヲ召サレ地雷水雷等ノ拜見ヲ允サレタリ地雷ハ二十四斤砲二十  
門曰砲各一門ニ製藥シ地中六尺許リニ埋メ水雷ハ木箱ニ火薬五十斤許リヲ納メ其ノ上部ニ木材數十  
個ヲ層積シ海中ニ沈メ御邸内望嶽樓ニ電機ヲ裝置シ通電スルニ發激ノ響山嶽ヲ振動ス水雷モ同ジク  
發シ幾多ノ木材悉ク空中ニ飛揚セリ之ヲ大試験ノ嚆矢トス而シテ後洋法ニ倣ヒ鑿山發掘ノ破襲ニ用  
フベキ旨命ゼラレ之ガ使途及砲臺上ノ岩崩シ等ニ試ミ許多ノ工費ヲ減ズルニ至リ益々研究スベキ旨  
ノ特命ヲ拜ス而シテ後海防ノ爲水雷數十個ノ製造ヲ命ゼラレ非常ノ用ニ備ヘラレタリ此水雷ヲ鹿兒  
島灣内ノ要衝ニ伏スベキ個所ヲモ豫メ定メ置クベキ旨ヲモ命ゼラレタリ日本ニ於テ電氣ノ用法開ケ  
タルハ之ヲ以テ權興トス

文久三年七月鹿兒島沿岸ニ於ケル薩藩ト英艦隊トノ交戦ニ際シ薩藩ニ於テハ豫メ設敷水雷ヲ布置シ敵  
ニ備ヘシガ英艦隊ガ鹿兒島灣行動中遂ニ該敷設面ニ接セザリシ爲奏劾スルニ至ラザリシモ蓋シ本水雷  
敷設ヲ以テ該兵器ヲ實戰ニ用ヒタル鼻祖ト稱セザルベカラズ本件ニ關シ薩藩海軍史中ニ左ノ記事アリ  
七月三日午後三時英艦隊ハ揚錨シ單縱陣ニテ南下セリ鹿兒島砲臺トハ多少ノ砲撃ヲ交ヘ行ル袴腰山  
上ニ向ツテ發砲シ烏島臺場前ヲ過ギテ殿艦二隻ハ洗出前ニ近寄リ赤水ノ臺場ヲ猛撃シ先頭艦ハ沖小  
島ト燃崎トノ間ニ針路ヲ探ラントセシガ沖小島ノ砲臺ヨリ倉卒ニ砲火ヲ開始シタリ是レ即チ一大恨  
事ニシテ其ノ當時ノ現状ヨリセバ無理ナル視察タルヤモ知レザレドモ沖小島ト燃崎トノ間ニハ電氣

點火裝置ノ水雷三個敷設シアリシヲ以テナリ其ノ成否ノ如何ニ拘ハラズ唯水雷ノ使用ヲ空シクシタルヲ甚ダ惜マザルヲ得ズ況ニヤ亦敵艦ヲ爆沈セバ其ノ功其ノ快果シテ如何ゾヤ此敷設水雷ハ安政年間齊彬公ノ製作セシメラレシモノトシテ集成館ニ保存シアリシヲ製作ニ與リシ宇宿彦右衛門ガ命ヲ奉ジテ大山彦助、川上六郎等ト共ニ七月一日茲ニ敷設ヲ了シメタルモノナリ水雷函ハ一寸五分ノ松板ニテ横三尺高六尺火薬三百斤ヲ裝填セシモノナリト云フ

明治維新萬象創始ノ際ニ當リ暫ク水雷火、水雷兵器等ニ關シ顧盼セラル、ノ遑無カリシガ如クナリシガ而カモ水雷火ノ海防上ノ價值ニ就テハ敢テ之ヲ藐視セルニアラザリシハ明治三年兵部省ノ起案セル左記「皇城ノ體裁ヲ定メ海軍場ヲ起スノ議」中ニ國防上強大ノ海軍ヲ整備シテ内外港ヲ嚴守シ且ツ樞要ノ所ニハ水地雷火ヲ裝置スルノ法ヲ豫備スベキヲ力説シアルモ明カナリ而シテ本文中ノ「水地雷火」ハ維新後公式文獻上ニ現ハレタル水雷ノ權輿ト認メラル

### 皇城ノ體裁ヲ定メ海軍場ヲ起スノ議

今度王政御一新大ニ御國體ヲ御興立被爲在江戸ヲ東京ト稱ヘ皇居ノ地ト被爲定候ニ付テハ此地ハ今日帝府ノ京ニシテ舊日幕府ノ都ト大ニ異ナルトキハ儼然京府ノ體裁ヲ備ヘ候様諸般御改正被爲在候デ不叶儀ハ申上グル迄モ無御座候乍恐桓武天皇平安城ヲ御建造爰ニ皇居被爲定候ヨリ一千餘歲更ニ遷都ノ議無ク列聖ノ御廟所モ京都ニ被爲在候處即今 皇居ヲ東京ニ被爲居候バ宇内ノ時勢ト

皇國ノ地形トニ從ヒ不得止ノ情勢ヲ御洞見被爲在故ト奉恐察候何者魯國近來黒龍口邊ノ地ヲ領シテヨリ漸次ニ樺太ニ侵入シ我北境ヲ奪ハントスルノ勢ヲ逞フスルニ我皇化ノ及ブ處尙未ダ奥羽ニ治カラズ況ニヤ北海道ノ開拓ハ稍其ノ端ヲ拓クノミ何ヲ以テ強虜ノ大欲ヲ制スベケンヤ因テ速カニ皇化ヲ東北ニ普達シテ 皇國ノ盡頭ニ至リ東北ノ民新タニ皇化ヲ被ルコト西南ノ民久ク皇化ニ浴スルコトト齊シカラシメ兼テ北門ノ鎖鑰ヲ嚴備シテ魯虜ヲシテ敢テ北境ヲ覬覦スルノ隙ナカラシムルコト現今至急至要ノ國務タリ故ニ京都ニ偏安在セラズ東京ニ遷都セラレ候形勝ノ便ヲ占據シ依テ全國ヲ保護維持スルノ大策ニ出ルナリ豈舊幕府ノ市民俄カニ都下ノ衰フルヲ以テ生産ヲ失ヒ糊口ニ窮スルヲ救助スル一時姑息ノ小計ニ基ツクモノナランヤ夫レ東京ノ地タルヤ屢船路ヲ通ジテ北海道及樺太ニ至ルベク速カニ車道ヲ修シテ青森ニ達シ易シ依テ海陸ノ運輸ヲ便達シテ開拓ノ事業ヲ進歩シ移民ノ生産ヲ得安カラシメ兼ネテ北門ノ守備緩急ニ應ズルヤ京都ニ比スレバ至便ナリ而シテ東京城ノ防禦ノ法ニ至リテハ觀音崎ト富津崎トニ對應セシムル至罕至堅ノ砲臺ヲ築造シ重大ノ大砲ヲ備ヘ以テ内海ノ咽喉ヲ緊扼シ品川臺場ヲ改正増築シテ内港ノ嚴備トシ更ニ品海ニ强大ノ海軍ヲ整備シテ内外港ヲ嚴守シ且樞要ノ所ニハ水地雷火ヲ裝置スルノ法ヲ豫備シ嚴ニ海陸双備スルノ方策ヲ畫定シ置カバ縱令魯英ノ強國連合來襲スルモ容易ニ我京城ニ攻メ近ヅクベカラズ故ニ全國ヲ維持スルニ便ナルト京城ヲ守ルニ堅固ナルト共ニ東京ノ地形帝府ニ適當スルハ明著ナリ(以下略)

之ヨリ先キ明治三年一月海軍操練所ヲ置カレシガ次テ同年十一月之ヲ海軍兵學寮ト改稱スルト共ニ内容漸次整備セラルニ至レリ而シテ兵學寮ニ於テハ砲術教授項目ノ一部トシテ地雷火及水雷火ノ包含セラルヲ見ルニ至リシモ未ダ到底砲術ト對立スルガ如キ地位ニ達セズ又教授内容モ僅ニ電氣的觸發水雷及反裝水雷ニ關スル座學程度ニ止マリシガ如シ當時定制ノ砲術教授項目ヲ参考ノ爲左ニ掲記ス

幼年本科學生		初級	四級	三級	二級	一級
壯年學生	前半年	火工小銃製作及用法	大砲彈丸煩車製作並操法	艦上操練並裝兵法	復習海岸煩臺	海防說
大小銃名稱 大小銃操練	第二半年	火工砲車彈丸種類並用法	艦上所載砲	野堡地雷火、 水雷火	野堡地雷火、 海陸戰法	海陸戰法
海岸煩臺	第三半年	火、水雷火	復習野堡地雷火、 水雷火	海陸戰法		
	第四半年					
	第五半年					

(註) 幼年本科學生二級及壯年學生第四半年ニ於テ水雷火ノ存スルニ注目スベシ